

| | |
|------------------|---|
| Title | 都市の生活と都市の構造 |
| Sub Title | Urban life and urban structure |
| Author | 山岸, 健 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1965 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.11/12 (1965. 12) ,p.1176(74)- 1207(105) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19651201-0074 |
| Abstract | |
| Notes | 奥井復太郎博士追悼特集 論説 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19651201-0074 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

都市の生活と都市の構造

山岸 健

- 一、はじめに
- 二、都市の生活
- 三、都市の構造
- 四、むすび

一、はじめに

小説をつくる時、わたくしの最も興を催すのは、作中人物の生活及び事件が開展する場所の選
 択と、その描写とである。わたくしは悪人物の性格よりも背景の描写に重きを置き過ぎるやうな
 誤に陥ったこともあった。

永井荷風「溷東綺譚」

永井荷風の作品を都市文学⁽¹⁾とみる試みは、的をはずれてはいないように思われる。背景描写に彼がいかに力を注いだか
 は、「溷東綺譚」をみてもわかるが、このような態度の結晶を「日和下駄」に求めてもさしつかえないであろう。

都市の研究方法の試みとして文学作品による都市観察⁽²⁾をとりあげ、この方法を用いなが
 ら、都市の生活と都市の構造について考えてみたい。このような方法には問題も残るが、
 都市の性格を把握する場合、この方法がこれまでの都市研究方法と並んで少なからず有効
 性を持つことも明らかである。

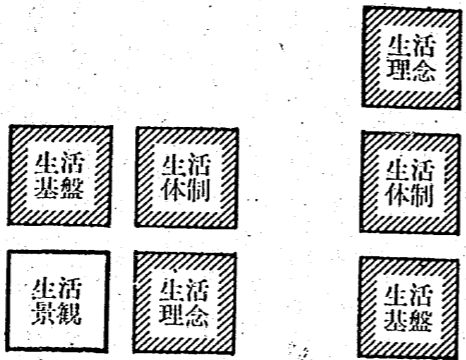
都市生活をここでは、生活基盤、生活体制、生活理念、生活景觀の四つの領域としてと
 らえてみる。これを都市の構造に分解すると、地域構造、階層構造、生活構造、形態構造
 の四つの構造となる。このような視点で前述の方法を使用し、都市の性格を分析してみた
 い。特に明治・大正・昭和の東京を下町と山の手を対照させながら概観し、下町と山の手
 の生活をとりあげる。

ところで、生活基盤、生活体制、生活理念というとらえ方は、奥井復太郎教授の都市研

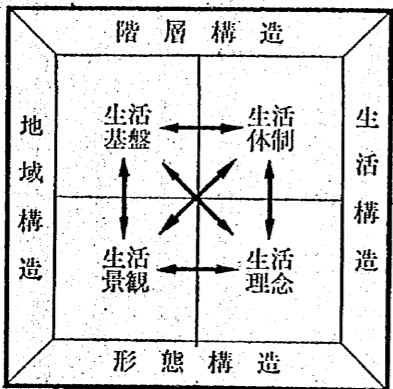
究の基礎にある考え方であった。その考えを土
 台とし、私はここで生活景觀という領域を加え
 てみた。奥井教授は、生活基盤、生活体制、生
 活理念の三者を立体的な相互関係でとらえ、こ
 の三者の変化の速度がそれぞれ異なるから、さ
 まざまな社会問題が生ずるとみた。これらの生
 活の各領域を図示すれば第一図となり、生活景
 観を含んだ四領域の相互関係と、これら四領域

七五 (一七七)

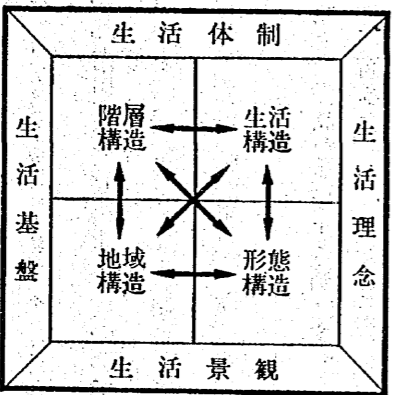
第1図 生活の領域



第2図 生活の領域と四つの構造



第3図 生活構造、階層構造、地域構造、形態構造



と四つの構造の関連性を示すと第二図、第三図となる。第三図は、第二図と表裏の関係にあるが、これは、地域構造、階層構造、生活構造、形態構造を基礎とする見方である。都市現象の分析は決して容易でないが、諸現象の相互関係を、ここで試みる四つの構造の関連性とみると、多彩な都市現象を分析する二つの手がかりがつかめるように思われる。なお、この四つの構造を重ね合わせた場合に浮びあがる都市の姿が、実際には問題となるが、ここでは考察の都合上、都市の姿をいくつかの生活の領域と都市の構造とに分解した。特に生活景観に重点を置きながら都市の構造をとらえてみたい。

(1) 奥井復太郎教授が、その都市研究において文学作品を使用する例は随所にみられる。荷風の作品を都市文学とみて、荷風における景観描写を都市研究に導入する手法は、荷風追悼講演会の席上でおこなわれた奥井教授の講演にもうかがわれる。「三田評論」第五八四号、一九五九年所収、奥井復太郎「荷風と東京——都市社会学の立場からみた荷風の作品——」を参照せよ。この講演で、教授の挙げた荷風の作品は「日和下駄」、「冬の蠅」、「ちぢらし髪」、「つゆのあとさき」、「遷東綺譚」である。荷風の作品の引用は、奥井「都市経済論」(二〇七頁、「遷東綺譚」)や著者「現代大都市論」(三六二—三頁、「つゆのあとさき」)、三六八頁、「ちぢらし髪」)にもみられる。「現代大都市論」の郊外地(郊外社会)の描写においては、なお、田山花袋の「東京の近郊」(三五五頁)、「東京の三十年」(三六八頁)、夏目漱石「三四郎」(三七九頁)が引用されている。

「荷風と東京」の次の一節は、基本的な意味を持つので、注目したい。「その一つの地域を与えてみますと、そこにおのずから生活するところの市民の生活の「集団」があります。その集団というものはその集団特有の経済度を持ち、それからメンタリテイを持つ。あるいは行動もそれ特有の型を持っており、そうしてそれらのものから、おのずからそこに作り上げられる、生まれ出て参りますところの風物、情景というものも他の生活とは違ったものになっている。従って景観と人間の集団生活とそれからその人間のパーソナリテイ、この三つが三位一体をなすというのが都市社会学の研究の一つのテーマなのであります。」(「三田評論」第五八四号、二五—六頁)

(2) 文学作品による都市観察は、特に都市の生活景観を知るのに有効である。しかし、作品による研究がいくつかの危険を伴うことも明らかである。

「都市生活の研究に当って根本理論的な研究を補足修正する意味で、調査、観察、会見等が行はれるのは上述したが、なほ利用すべき事項がある。小説、新聞、雑誌等に於ける記述である。かゝる文学的ジャーナリスティックな記録(過去及び現在の)を利用する事は

頗る学問的には危険を伴ひやすい。蓋し、是等のものにはいづれも誇張が在り曲筆舞文があるから、往々にして事実存在しないものを捏造する事さへある。しかし、若し或る事実又は事実ならざる事が恰も実在するもの如く一世に喧伝せらるゝとすれば、其処には相当の理由が在ると思はれる。さうした虚実が事実として受け容れられるだけの社会性現実性がある事を見逃してはならぬ。此の点で充分慎重な態度を持って接するならば、可成、豊富な材料を獲る事が出来る。殊に文士記者は其の性能上、頗る観察に鋭く直観的に問題の本質を把握する妙を得てゐる。都市社会学では都市市民の性格構成及び色々の社会典型を区別する。しかし、市民の諸種の典型の如き、最もよく文士に取材され、小説戯曲の内に描かれてゐる。」(「都市経済論」五七頁)

文学作品による研究には一定の限界があるが、その範囲内では、この方法により都市の景観と人間生活の一断面にするとい光をあてることが出来るだろう。

W・A・スモールの「都市成立史」の前半に文学的手法がつかわれていることは明らかである。

An Introduction to the Study of Society, A. W. Small & G. E. Vincent, Book II, The Natural History of a Society, The Family on the Farm → The Rural Group → The Village → Town and City.

スモールのこの著書に対して奥井教授は深い愛着を抱き、都市研究の古典としてこれを評価したことは、教授の研究生活から私の知るところである。「再論『現代大都市論』」三田学会雑誌、第五六巻、第一〇号に次のような箇所がある。

「まさに都市現象は万華鏡的である。特に意識したわけではないが『現代大都市論』は何んでも論じてあるという批評を受けた様な始末である。一斑をみて全貌を知るといふ言葉が筆者の研究態度であった。筆者が都市研究の古典的文献として尊重するW・A・スモールの社会学研究入門の一章「都市成立史」は米大陸西部の大都市が人跡未踏の大草原の一角に若い開拓者夫婦がさまよい込んだ時の描写からはじまるのであるが、村落形成の以前まではこの開拓者夫婦、ならびに部落成立の過程を叙述的に記録している。まさに文学的手法である。しかし都市ならびに大都市時代の分析解明については、極度のゼネラリゼーションを行っている。この方法的対照はスモールが意識して行っているところで、後段の段階では統計学的方法が正しく適用されるマス・ソサエティーとして大都市となつてゐる。筆者はこの場合でも大都市社会の成立・構造・性格、つまり全貌を弁えておれば、そのうちの一人格、つまり一斑をとらえて全貌を語る事が出来ると確信している。勿論、スモールがその著の前段で採用した様に文学的叙述に止まる恐れもあるが、或いは又社会学の領域でしばしば採用されるパーソナル・ヒストリー、乃至はドキュメントとして可能であるかも知れない。」(一三一—一四頁)

文学作品による都市研究の例として次の文献がある。

Sociology Through Literature, edited by Lewis A. Coser (section ten: Urban Sociology, Herman Melville, James Thomson,

都市の生活と都市の構造

Thomas de Quincey, Jules Romains, Honoré de Balzac.)

文学作品による東京の郊外の描写として拙稿「東京の郊外」三色旗10、一九九号、一九六四年を参照せよ。本稿の基礎をなす生活構造、階層構造、地域構造、形態構造の考え方を最初に試みたのは、「東京の郊外」においてである。

(3) 奥井教授の都市に関する基本的見解をここで要約しておきたい。

- 1 都市は序列的構造を成し、都市体系を構成する。都市を全国的な枠組の中にとらえる必要がある。
- 2 都市の序列ないし体系は、経済体制、政治体制と密接な関連を有し、序列ないし体系の変動は、政治、経済体制の変動と相応するものである。ただし、経済的な要素のみが都市の性格を規定するのではなく、非経済的要素をあわせて考えなければならぬ。
- 3 都市には生活共同体としての側面と都市機能の側面があるが、都市の序列や性格を決定するものは、都市機能である。
- 4 社会生活の中心機能の所在地として成立した都市は、人間解放の場であり、広い世界に対して開かれた窓である。
- 5 制度的社会である都市は、生活機会の獲得と生活享受の場であり、そのために人々は経済力の存在する都市に集合する。

次に奥井教授の所説のうち、注目すべき一節をいくつか挙げてみよう。

「都道府県それぞれは構成的には並立的のものであるが、都市だけは絶対的に序列的構造のものである事を指摘したい。……都市の場合にも人口数だけで見れば多い少いだけの量的関係であるが、都市は、それぞれの成立が一国に於ける機能的構成によって明かに上位・中位・下位、中心・末端と序列的編成をうけ、それに従っての性格を持つということである。同時に都市のこうした序列は経済・社会組織的なもので、現代の都市圏は二十世紀中期の組織的所産である。……都市現代図に過去の歴史的影響を無視することは許されないが、それにしても、どこの国をとって見ても、一国の都市図はその国が今日に占める経済・政治・社会的組成に基づく構造図である事には変りがない。……開かれた窓という点から都市を見ると都市は常に新風を流入せしめる通路であって、単に東京のみならず全国大小の都市いずれも斬新・流行に対してその場所を提供している。……同時代的にも都市の規模や性格はその都市を成立せしめる諸力の規模・性格によってそれぞれ異なり決して一様ではない。……国際政治・世界経済の関係動向の裡にその国として位置づけを持つ都市もあれば、一国、一地方という関係でその位置を定められる都市もあり、更には純然と地方的規定にのみよる都市もあり得るわけである。」

「現代大都市の経済社会的性格」(講書始めの儀における記録)

「都市又は都市的なるものは広い社会生活の中心機能の所在として成立した。従って各時代各土地に於ける組織発達の程度に対応して、中心態型も色々と変化して来る。一国にあって、一、二しか算へ得ない様な巨大な都市(人口数百万に及ぶ大都市)は現代社会・経済組織の中心機能乃至は支配中枢として其の成立を見たのである。(二六頁)……都市が人口を集合せしむるに当って生活機会及び生活

利益の提供を以てすると云ふ理論からして、都市と都市人口との間にその経済力を中心としての関係が成立する。(七八頁)……要するに、都市は人口を集中せしめる半面に、之れに該当する経済力を持つ事になる。此の経済力が経済的關係に於ける都市の本質に繋る。社会経済の組織に於いて中枢的な都市は、其の経済力に於いても最も強力なものとなる。此の強力な経済力に養はれ、又は対応する所の人口は、当然巨大となる。現代の都市現象はどこ迄も此の社会・経済的制約の上に立つ。(八三頁)「都市経済論」

「いかなる時代の都市現象もそれを生起させた時代の約束と運命、並びにその時代が果し、且つ果さんとした使命とによって、観察されなければならぬ制約を持つ、という説は今日にいたるまで筆者の所懐するところである。構造論的には、それぞれの時代が如何ようにあつても広義の社会結合のうちにあつて中枢的機能を果たす中心としての、且つその空間的表現としての都市現象を認めるに吝かでないが、社会結合の時代的变化は当然、機能中心の現象たる都市の在り方にも現実に幾多の変化を及ぼさずにはいない。」再論「現代大都市論」、三田学会雑誌、第五六巻、第一〇号、二―三頁。

「わが国の都市現象に於ても見られるとおり——各地の都市現象はその地方経済の優劣性を示すバロメータとも云える——幕政時代には比較的東北とか西南、表日本とか裏日本とかの差別なく大藩雄藩の城下町は一流級に属する都市を發展せしめていたが、明治維新以来、資本制経済社会の進展と共に漸くこの都市体系に変化が生じ、東北は西南に、裏は表に、漸次、格差をつけられその劣勢を著しくして来た。殊に新しい経済体制の進行と発展に伴い、この現象は著しくなり、大正年間にははつきりと東京と大阪、この二大中心を結ぶ東海道路線が軸線として完成した。」「リージョナリズム」、三田学会雑誌、第五七巻、第七、八号、一一頁。

(4) 生活景観の素材としては、例えば、住居、道路、交通機関、耕作地、服装などが挙げられる。什器、道具類を含めて住居は生活の基本的な場であるから、住居にはそこで生活する人々の生活様式が反映しやすい。建築一般についても同様である。

二、都市の生活

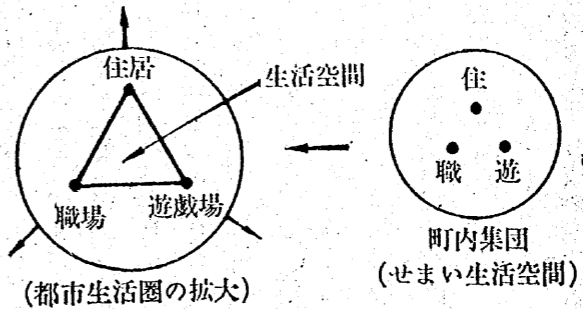
ある町を知るのに手頃な一つの方法は、人々がそこでいかに働き、いかに愛し、いかに死ぬかを調べることである。

カミュ「ペスト」

都市は人間解放の場である。都市生活の一面をこう表現してもよいだろう。都市は変装の世界であり、奥井教授の言葉を

都市の生活と都市の構造

第4図 生活の三拠点



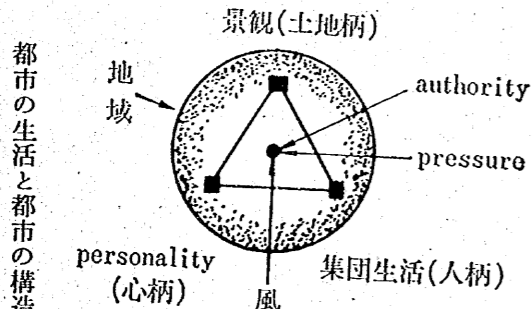
る。住居、職場、遊戯場を生活の三拠点とみると、この三拠点を軸として生活空間が描かれるし、都市生活圏もこの考え方を基にして設定される(第四図を参照せよ)。

明治以降の東京の生活は、右に挙げた生活の三拠点の分離、拡散の過程で築かれてきたのである。それは、近隣社会の崩壊を意味した。狭い範囲で生活が完結しないのである。生活の三拠点を軸として展開する行動の軌跡が、生活景観を生みだしてきたと考えられる。

もともと生活が展開する地域には、その地域独特の景観があり、特有の生活様式がみられるものである。東京に限定すれば、交通機関の発達と生活体制の変革により、生活圏が拡大し、社会的な流動性が増加して、そのために、地域、景観、生活様式が急速に変貌をとげ、解体、消滅の道をたどった例も決して少なくない。それでもなお、かわりつつある地域は、そ

の地域を他と区別するような特性を示している。この点を図示すると第五図となる。一定の地域にみられる景観(土地柄)と集団生活(人柄)とパーソナリティ(心柄)とは相互に密接に結びついているから、その地域には一つの統一性が生まれ、その地域特有の pressure が存在するようになるのである。だから、他の地域に入ると風がちがう。この pressure は authority でもあるといえよう。一定の地域を与えてみると、そこには特定の集団生活がみられる。その集団には特有の思惟行動様式があり、人々の行動は、ふつうその集団の、あるいはその地域の pressure-authority の統制をうけながら営まれるものである。その過程で、いわば日常生活の結晶たる生活景観が現れる。生活景観を通じて、その地域の集団生活や社会的な相互作用の姿を知ることができるのである。

第5図 地域の構造



都市の生活と都市の構造

都市に人口が集中するのは、都市に経済力があるからで、いいかえれば、都市には生活機会を獲得して生活を享受する場が備わっていることである。奥井教授の所説によれば、生活機会の獲得は職場を決定し、capital につながるもので、一方、生活の享受は住居を決定し、wealth につながるものである。従って、ある土地がどれだけの人口を集めるかは、(また、人口の再配置は)その土地の資本及び富、つまり経済力によって決まるので、この経済力の分析が、都市経済の中核理論とみなされた。都市が周辺地域を統轄する中心機能の所在地となり、結節点として発達してきた背後には、以上のような背景がある。ただし、都市はたんに経済活動のみでなく、政治活動や文化活動の中心としても成立し、発展したことを考えてみなければならない。たしかに都市は、各種のコミュニケーションの中心である。

都市の生活は以上のような社会的背景を持ちながら、次第に分化してきた。集団の洪水がみられる都市において、人々の生活は多くの集団に分解されるようになり、生活の断片化と個人の孤独化が現出している。人間解放の場であった都市が、一面において砂漠化しつつあ

るといってよいだろう。今日の都市問題については、ここであらためて触れる必要はないだろう。ただ都市の生活構造の多
元化、階層構造の異質化、地域構造の分化、形態構造の多様化が、都市生活に深い影を落している事実を思い浮べる必要が
ある。生活基盤、生活体制、生活理念、生活景観のそれぞれの相において、都市の生活は大きくゆれ動いているのである。

(1) 三田評論、第五八四号、「荷風と東京」三〇―三二頁を参照せよ。

荷風の次の一節は、変装の世界をたくみに描いている。また、この一節は、土地柄についての鋭い描写となっている。

「今まで書くことを忘れてゐたが、わたくしは毎夜この盛場へ出掛けるやうに、心持にも身体にも共に習慣がつくやうになってか
ら、この辺の夜店を見歩いてゐる人達の風俗に倣つて、出かけには服装を変えることにしてゐたのである。これは別に手数のかゝる事
ではない。襟の返る縞のホワイトシャツの襟元のぼたんをばづして襟飾をつけない事、洋服の上着は手に提げて着ない事、帽子はかぶ
らぬ事、髪の毛は櫛を入れた事もないやうに掻乱して置く事、ゾボンに成るべく膝や尻の褶り切れたくらゐる古いものに穿替る事。靴は
穿かず、古下駄も踵の方が台まで摺りへつてゐるのを捜して穿く事、煙草は必バットに限る事、エトセラノである。だから訳はな
い。つまり書齋に居る時、また来客を迎える時の衣服をぬいで、庭掃除や煤払の時のものに着替へ、下女の古下駄を貰つてはげよい
のだ。

古ゾボンに古下駄をはき、それに古手拭をさがし出して鉢巻の巻方も至極不意気にすれば、南は砂町、北は千住から葛西金町まで
行かうとも、道行く人から振返つて顔を見られる気遣ひはない。其町に住んでゐるものが買物にでも出たやうに見えるので、安心して
路地へでも横町へでも勝手に入り込むことができる。……朦朧円タクの運転手と同じやうなこの風をしてゐれば、道の上と云はず電車
の中といはず何処でも好きな処へ啖唾も吐けるし、煙草の吸殻、マッチの燃残り、紙屑、バナ、の皮も捨てられる。公園と見ればベン
チや芝生へ大の字なりに寝転んで軒をかゝうが浪花節を唸らうが是亦勝手次第なので、啻に氣候のみならず、東京中の建築物とも調和
して、いかにも復興都市の住民らしい心持になることが出来る。」永井荷風「溼東綺譚」九〇―九二頁。

(2) この点について、奥井教授は、現代大都市においては、共同制裁が消滅しつつある、とみる。「再論『現代大都市論』」九頁。

(3) 奥井教授は、職、住、遊を中心として、三点図型を描いた。「昭和三十年度大学講義〈都市問題〉ノート」

(4) 奥井教授は、東京的な市民生活の勢力圏を都市生活圏と称した。都市生活圏の決定は、行政都市に対する実体都市の範囲を決める
問題につながる。「都市経済論」一三二頁。

(5) 「先づ地域乃至地区と云ふ言葉は、妓では、或る特定の生活様相乃至は利用形式の主として行はれる一区劃を指して用ひる。英語の

クォーターと云ふ字と同じ意味である。」「都市経済論」九四頁。

「要は是等の事象に示された様に、各地域が特殊な生活者と特殊な生活力と、従つて特殊な生活様式と理想とを持つてゐる事が明かに
せられ、ばい。其の結果、各地区は独自の生活様相と生活理想とを持ち、妓に独特の空気が醸成され、斯くして此の地区が別天地を
構成する。此の小天地は居住者にとつては安住の地であり、他者にとつては外国である。」「現代大都市論」二六〇頁。

(6) 「斯かる事情からして都市内部の地域的な文様は同時に居住者の行動型ともなり、合せて居住者の心的状態にも通ずる理である。
……かかる意味に基いて景観の社会学的意義が生れる。景観とは一定の地域に於ける空間(平面的立体的空間)の充填物を云ふ。生態
現象を物象的に見たものが景観である。景観とは風景・景色の謂に外ならぬ。しかし以上述べて来た所によつて景観を構成する諸物象
は、其の地域の全生活の物的表現に外ならぬ事に気がつかれるであらう。してみると社会生活は地域的表現を持つと同時に具象的表現
を得る。紐育マンハッタに於ける高層建築の偉容は、紐育の代表する金融資本の景観である。……盆暮の売出しに賑し過ぎる商店街
はネオンや旗幟、更にデジタを添へて街頭景観をつくる。」「都市経済論」九九頁。

「景観は何れも特定の生活に規定され、更に又、其の生活の各断相によつて規定されてゐる事を了知する。……更には是等諸景観は結局
人間生活の営みの外的表現である」と云へる。併かし、其れは直ちに個々の人間生活の表現とは云へない。寧ろ其れは各個人の社会的関
係に於ける生活表現である。……特定の景観及び其れ等の相互的交渉は特定の社会的、経済的、文化的関係及び構成に於いて規定され
てをり、従つて景観の描写又は分析綜合は、之れを以つて其内に含まれる社会的、文化的、経済的生活を指示するモメントになり得る
といふ約束の下に、吾々は景観論を社会学的に取扱ふのである。」「現代大都市論」二六五―二六六頁。

景観のなかでも特に建築は、生活のシンボルとしての意味を持つのである。

「一地域の持つ建築、家屋、街路、地理、背後地、地代、地価等は、いづれも其等に関連した社会的意味を含んでゐるのである。」「都市
経済論」一〇〇頁。

「建築は実的用途に即するものであるが故に、最もよく其の地域性を示す。事務所用建築、商店用建築、官庁建築、住宅建築等々いづ
れも其の土地に行はれる活動又は居住する住民の性質を物語つてゐる。住宅地に於いては、居住者の経済力に応じた建築的变化が出来
る。巨大なる高層建築も、単に営利的な建築である以外に資本の偉力の表示でもある。」「現代大都市論」二五九頁。

ニューヨークの摩天楼は「垂直の都市ニューヨーク(ル・コルビュジエ)のシンボルであるが、それはまたアメリカの経済と文化
の記念碑である。人間の尺度を唱え、輝く都市を目指したル・コルビュジエはこう書いている。

「摩天楼はここでは都市計画の要素ではなく、青空の吹流し、打ち上げ花火、帽子の羽飾りである。……ニューヨークの摩天楼の歴史

は、効用や虚栄の問題と入り混っている。ウォール街に高い建物が建てられたのは、短時間に事務を処理するため、株式取引所の廻りに事務室を積み重ねなければならなかったからだ。人々はそこに、大峡谷、荒々しく深い裂目、かつてない街が現われ出るのを見た。……道具としての摩天楼、自由な敷地の広さと建物の高さとの函数、それがニューヨークのなすべき次の仕事である。……摩天楼は道路から垂直に立つ仇っぽい女の羽飾りであってはならない。それは、人口集中のための奇跡的な道具であり、広く開放された空間に置かれる。摩天楼の人口密度と足元の開放された広がり、この二つは引離すことのできない函数をなしている。一方で欠ければ、もう破局だ。以上でニューヨークがどんな状態にあるか、お分かりであろう！ル・コルビュジエ「伽藍が白かったとき」

奥井教授は組織と素材について次のように述べた。

「大都市社会の理解はその社会を包含している全社会組織及び構造の理を弁える事から可能になる。元来組織そのものは、現有素材に基礎を置くが故に、組織自体は一定の精神と原理とに基いて特有の統制を行う。……例を建築にとるならば、紐育、東京にみられる様な摩天楼群は鋼鉄とコンクリートを素材としてはじめて可能化されたもので、その建築的特色は如何に高層化されても、地面に最も近い部分の階層から既に十分な照明空間をそなえて有効利用面積になっているという点である。……即ち建築技術はスタイル・コンクリートの利用に於てビジネス・センタアの都心的過密を可能にした。かくの如く素材は組織のあり方を規定する一つの要因である。」

「再論『現代大都市論』」五頁。

(7) 現在、東京では佃島が特殊な景観を示す地域の一つである。しかし、この地域も佃大橋の架橋で、今後急速にかわって行くかもしれない。佃島に関しては、本塾の佐原六郎教授、中井信彦教授を中心として共同研究がすすめられている。

佃島に関しては、佐原六郎「佃島とその社会・文化的変化——東京都中央区佃島調査序説——」慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要、第二号、一九六三年を参照せよ。

永井荷風、断腸亭雜藥、「築地草」に佃島があらわれる。

「われ胃を病むこと久しければ朝まだき居留地を歩み佃の渡わたりて住吉神社の参詣をばその日その日のつとめとなしぬ。佃島今は全く漁村の趣を失ひたれど猶貝殻捨てし路のほとりに碇を引上げ人家の軒に投網を干したるなぞ佃煮売の家の小旗と共に捨てがたき眺なり。」

(8) 「一つの場所を与えてそれを分析すれば、家賃にすればどのくらい、地代にすればどのくらい、地価にすればどのくらい、家の構造はどうだろう、ここでは一年にこれだけの収入のあるような者が住まえて、たとえばその職場におけるところの身分はこんなものだろう、そうすると家庭関係はどうであろう、ものの考え方、つまり生活の理念、生活の信条というものはかようしかじかではないかというところが結論的に出せるのであります。……一つの場所があつてそこには必然と人が生活しているというだけでなくて、その土地柄と人柄と心柄、この三つが三位一体的の一つになつていふはつきりした社会調査上の結論があるわけなので、私がここで問題にしておりますのは、荷風がこういふところを、文学者としての、作家としての非常に鋭い洞察力といえますか、観察力で、そうして平々凡々にこれを描いていることであります。」荷風と東京「三田評論、第五八四号、一九五九年、二六―七頁。

(9) 都市経済の中核理論である経済力の分析は、具体的には次のようになる。

(一) 其の都市にどれだけの富があるか。

(二) 其の富がいかなる径路をもつて都市に存在しているか。

(三) 其の富がいかなる方向に分割配置されているか。

(四) この富によっていかなる人口が養われ利益を得ているか。

(五) 其の富が集り、且つ散じ、再び集る道程に一定の法則があるかどうか。「都市経済論」八一頁。

(10) 現代の都市は個人を孤立させ、個人は群のなかの気泡となりかねない。たしかに都市生活に気楽さはあるが、その反面、都市のもつ非情さをおおいかくすことはできない。

「物の音澄む秋・手にとるやうに響く隣人の物音・こちらの音も かうして 向うへ聞えてるだらう・町住みの気安さ・何する人とも聞かずに過す気安さ」「秋の家」、釈迺空、現代濠樓集

「その晩、市は首府の仮面をかぶっていた。……通りは、日曜日の休業で鎧戸を下し、華やかに着飾った群集がうようよしていた。たとえば、光に映える真珠のように、街灯は高い柱の頂きから、下の生きている組織を照した。そして、この組織は間断なく形と色を変えながら、暖かい灰色の薄暮の風の中へ、不変の間断ないざわめきを放散していた。」ジョイス「ダブリン市民」

「大都市の隔離状態におかれた人々は、自分と似た意見を持つ人々と接近する傾向がある。……大都市社会では、人々は自らを大都市の刺激から守るために、無感動な礼儀作法をつくりだす。……彼等は自分たちの住む社会の構造と、その中における公衆としての自分たちの役割など認識しない。都市はそのような狭小な環境から構成されており、都市に住む人々は互いに隔離される傾向がある。都市の「刺激にとんだ多様性」も、「寝室地帯」、bedroom belt すなわち、ある一つの階級が集まり住んでいる郊外地帯に住む人々を刺激しない。この人々は自分と同じ種類の人々しかしらずに生活しているのである。大都市に住む人々は、他の環境におかれた人々と接触する場合にも、ステレオタイプと偏見にみちたイメージを通じてしか接触しない。そのような狭小な環境におかれた人々に対し、マス・メディアは、彼等の外部にばかりでなく、彼等の内部についてさえ、擬似世界をつくり出すことができるのである。」

ライト・ミルズは、「パワー・エリート」でこう述べている。
今日の都市は、擬似イベントの世界であり、ブーフステイン (D. J. Boorstin) の言葉を借りれば、われわれは「幻影の時代」に生きていくのである。

三、都市の構造

新開地を追うて来て新たに店を構えた仕出し屋の主人が店先に頹杖を突いて行儀悪く寝ころんでいる目の前へ膳碗の類を出し並べて売りつけようとしている行商人もあった。そこらの森陰のきたない薬屋の障子の奥からは端唄の三味線をさらっている音も聞こえた。こうしてわが大東京はだらしなく無設計に横に広がって、美しい武蔵野をどこまでもと蚕食して行くのである。……思うに「場末の新開町」という言葉は今の東京市のほとんど全部に当てはまる言葉である。

寺田寅彦「写生紀行」

大正十一年一月の中央公論におさめられたこの寅彦の「写生紀行」は、当時の新開地、つまり郊外の生活をいきいきと描いている。明治以降の東京は、ここにあるように武蔵野を蚕食しながら拡大し、都心にビジネス・センターがあらわれ、郊外は住宅地として開けて行った⁽¹⁾。郊外には郊外文化が渦巻き、通勤現象が広くみられるようになった⁽²⁾。こうして下町と山の手が次第に分化していったが、その過程において、下町が変貌するのである。それは、住居と職場の分離にみられる。ここには、商法の変革があった。大づかみにみると、trade から business へという流れである。このような経済生活の変遷は、人々の生活の仕方（生活体制）に影響を及ぼし、また、ものの考え方（生活理念）にも直接・間接の影響がみられた。地域社会の枠がゆるみ、人々の関心は分散し、生活圏は拡大した。明治・大正・昭和と移るにしたがい、下町、山の手風俗といわれるものは、解消し、平均化される傾向があった。

奥井教授によると、明治から大正にかけての東京の生態学的にみた変遷は、(一) 都心地区の完成、(二) 郊外の発展、(三) 交通網の整備ということになるが、生活の面で見ると、明治年間の生活には計画性があり、一年の行事が決っていたのに、大正に入ると、この反動で生活は出たとこ勝負のものとなり、昭和に入り、再び生活の計画化が叫ばれるようになったという。そして、明治から大正にかけての変化のうち、最も大きい変化は、職場と住居の分離であり、それと並んで、現物給与から現金給与へという賃金支払い方法の変化も大きなかかり方であった⁽³⁾。

「活動写真小屋から cinema palace へ」という phrase は大正から昭和へといううづりかわりを意味している。」(奥井、昭和三十年大学講義「都市問題」ノート、筆者の筆記による)

集団の水準でとらえれば、明治東京以降においては、身内集団の比重が軽くなり、他人集団の重みが増加したといえてよいだろう⁽⁴⁾。生活方法の急激な変革に対し、人々の心がまえが、その変革に対応してかわったであろうか。これについては次のような解答を試みることもできよう⁽⁵⁾。

「大正年間は所謂トレイドからビジネスへの変転期であった。小さくとも一業の主であったものは、容易に勤人には転換が出来なかった。しかし大正という年代の持った改革性はいや応なしにこの転換をやったのけた。東京でみた下町と山手風俗の解消である。この経済的必至に基いて心理的精神的転換も可能になった。やがては市民精神として平凡なサラリーマン気質・性格が完成したのであった。工業方面においても住み込みの職人徒弟から工場労働者への変化があった。こうした根本的な変革にあつては、いかに執拗な心理感情的なものも徐々ながらも変らざるを得ない。」(奥井、「現代大都市の経済社会的性格」)

さて、山の手と下町についてみるに、明治末年にはその対比がみられたようである。平出鏗二郎があらわした「東京風俗志上の巻」(明治三十二年十月発行)によると、山の手と下町はこのように描かれている。

都市の生活と都市の構造

「地勢は西南は丘陵相連なれども、東北は概ね平坦なり。西南の丘陵相連なれる処を山の手といひ、東北の平坦なる処を下町といへり。麴町、麻布、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷は山の手に属し、神田、日本橋、京橋、下谷、浅草等は下町に属せり。下町は江戸開市の後、夙に市井を形造りて、繁盛を極めたれども、山の手は武士屋敷その大半を占めたれば、なべて物寂しきさまなりしが、維新以来次第に開けて多く町家建ちつづき、大いに面目を革めぬ。されども地勢もと偏陬にありて、交通の便割合に宜しからざれば、盛に商業を営まんとするは、さながらに下町に住まひ、官吏会社員の如きは、寧ろその静閑なるを好むで山の手に居れり。斯くの如く山の手と下町とは地勢の上より自らに区劃せらるゝのみならず、住者の多数また異なれば、風俗従うて異なる所あり。下町は風俗の変遷特に劇しく、時々流行^一にこゝに基を発し、山の手は常にこれを追うの傾あり。都市の端々隅々を場末といふ、多くは細民の住める処たるが上に、域、郷曲に接すれば、風俗稍々鄙陋にて田舎染みたり。」

芸能が生活にどのような浸透しているかという点、三絃(三味線)は下流の少女にうけいれられ、中流以上の家庭では箏(琴)がたしなまれている。

「三絃は下流に至るに従うて益々用ひられ、上流に向ふに従うて弥々用ひられず、また下町に至るに従うて勢力ありて、山の手にては遙かに箏の下にあるなり。……能楽の盛なるにつれて謡もまた大に行はる。中流以上の交際場裡には、謡の一節をも謡ひ得るを、人品の高尚らしく思はるゝさまなれば、下町辺の富家には、その子弟をして師につきて学ばしむるもあり、山の手辺の官人などは、夜の徒然なるまゝに、これを稽古するも少からず。……そも少女に手踊を始めこれらの遊芸を習はしむるは、町家の風にして屋敷風としては箏を習はしむるを常とせり。今や下町辺の町家さへ、家風次第に屋敷風に移り、三絃は下劣なりとして、多く箏を習はしむるがために、常盤津・清元・長唄等に合はする手踊も、従うてまた衰へざるべからず。」(平出鏗二郎、「東京風俗志」下の巻、明治三十五年発行。)

このように生活における芸能受容の形態が、下町と山の手で異なっていたということは、下町と山の手性格が、その歴史、住民の職業、生活慣習などの点で相違を示していたという意味で注目される。服装、髪形、对人的呼称、遊芸などの面で、下町と山の手は鋭い対照を示していた。⁽⁶⁾

「遊芸にしても山の手は、バイオリン、オルガン(明治期にはピアノは未だ登場せずと見てよろしかろう)に対して下町は断然三味線であり、下町の清元、新内に対して山の手は謡、唱歌となっていた。」(「明治・東京の性格」三田学会雑誌、第四六巻、第六号。)

明治の東京を下町により代表させ、昭和の東京を山の手によって代表させてよいだろう。大正の東京は、下町の崩壊と山の手の発展の過程とみてよい。東京の郊外は、大正年間に著しく拡大したが、その背景には、交通機関の整備、発達もあった。この郊外の拡大は、主として東京の西南部においてみられたのである。なお、大正十二年の関東大震災が、郊外の開発を促したこともみのがせない。職場と住居の分離が、下町の崩壊の一因をなした点も注目される。経営の面では、大福帳から近代的経営の事業經理へという変遷がみられるが、それは、家計と事業經理の分離を意味するのである。

さて、明治の東京を下町に代表させると、明治東京の代表的市民を下町の商人及び職人と考えてよい。それに対し、昭和東京の代表的市民を勤人とみてよいだろう。もちろん、山の手、下町には役人、軍人、教師、会社員、商人などが入り混って在在していたのであるが、両地域の典型を右のようにみて下町と山の手の性格をとらえても大きなあやまりはないであろう。⁽⁷⁾すでに住居が、その地域の生活景観を代表し、居住者の生活を如実にあらわすものであると述べたが、住居形態はどのような対照を山の手と下町で示すであろうか。平出鏗二郎の言葉を借れば、下町の町家住居と山の手の屋敷住居という対照を描いてよいだろう。彼はこう述べている。

「住居の制は、住者の業務及び生活の程度によりて異なるは素よりなれども、概ね屋敷住居・町家住居の二類に別つべし。官衛、学校、会社、工場等の如き建物を除き、屋敷住居は、古への武士の邸宅の遺制にして、今も官吏を始め所謂勤め人の住ふに適し、町家住居は、商売工匠の住ふ為めに構へたれば、店を開きて業を営むに適へり。屋敷住居は、街路に接して屋を構へず、先づ表に門を建て、塀牆を繞らす、門を入りて屋に到るべし。町家住居は、街路に望みて屋を建て、門なく塀牆なく、隣家と軒を連ぬ。これにも商家と職人住居とによりて異なる所あり。」⁽⁸⁾

芝木好子の小説「湯葉」は明治後期の下町の商家を題材とし、「隅田川」は昭和初期の下町の商家を扱っている。これらの作品から下町の景観が描かれた一節を挙げてみよう。

「下町の庭はあるかなしの狭さである。裏は露地で、家が密集している。……お茶の水橋を渡って大名屋敷のある高台から町中へ降りて

ゆくと須田町はもうすぐであった。銀座から日本橋を経、神田須田町のめがね橋（万世橋）を渡って御成街道を上野へ、さらに浅草へゆく道筋は、明治年間から大正へかけて東京の主要な繁華街をぬう幹線道路であった。下町の股賑ぶりを反映して商家も瓦葺土蔵造りの家が多く、隅田川にそそぐ川筋が途中に引かれていた。神田須田町は人の往来が繁く、当時東京一の交通量を誇っていた。美濃屋は須田町の表通りを一つ逸れた横通りの角にあった。二階建ての堅牢な土蔵壁で、窓はちいさく観音開きにそとへ開いた。階下の店先は入口に暖簾が掛って、暖簾は濃茶に「湯葉」と白く染めぬいて、左端に美濃屋と記してあった。……店の内は土間が左へ鉤の手にずうつと伸びて、仕事場に通じていた。片側は店から帳場、奥の間とつづいていて、途中の廊下に階段がついていた。左手の土間の奥は厨で、そのわきに堀井戸があり、そこからさきは広い仕事場であった。……通りはむかいが酒問屋で隣りが雑貨屋、その間の露地をはいると長屋が三軒つづいていた。「湯葉」

大正十二年の関東大震災は、東京の生活に大きな変革を及ぼした。郊外の開発と地域社会の変貌が、大震災を契機として著しく進んだのである。

昭和五年の浅草はすでに古い浅草の面影を失いはじめていた。大正十二年の関東大震災で跡かたなく焼けつくされたために、江戸時代から続く老舗なども新築の安普請に変わって、土蔵作りの店などは少なくなってしまい、古い由緒ある街の面影が安易で粗雑なものに変えられてしまっていた。それでも復興の気配は濃厚で、まだ東京の繁華なところは銀座か浅草であったし、街には自信と活気があった。恭子にとつての浅草は、街そのものが自分の領分であった。彼女の家は雷門から馬道、六区にかけて股賑を極める目抜き通りとは電車通りを隔てていた。こちら側は電車通りに夜店もでないし、どの町筋もひっそりして、馬道の大店の住居があったり、医院や隠居所や紙問屋などが並んでいた。雷門からひとつ目の通りをはいって、最初の四つ角に万屋という衣裳店がある、その隣りが恭子の家であった。表付は仕舞屋とも呉服問屋ともつかない構えで、硝子戸が六枚嵌めこまれていた。

万屋の土蔵倉と恭子の家の間には両家だけが使う細い露地があつて、そこをはいると内玄関だった。下町のことと格子戸は磨きこまれて光っている。内玄関をあがると細い廊下の前が一握りほどの坪庭で、そこから一方は店へ、片方は奥と分れている。……風呂場の窓とすれすれに裏の二階家が建っていて、下町の込みいった場所らしく内緒話が手にとるように聴えた。震災前まではその家の向方にまだ原っぱがあつたものだ。……

大正から昭和に移ろう社会に、好況と不況の波が繰返し押寄せて、消費の町を脅かしたのも子供の恭子は覚えていない。ただ震災を境にして浅草の伝統が失われはじめたのは、古いれんの店が趣きを変え、盛り場が安手に、物欲しげに、風格を失いはじめたことでも知れた。浅草にデパートができるという噂も、無性格に変わりはじめた浅草の一つの現象であった。恭子が幼時から馴染んだ芝居の劇場さえ、レビニュー小屋に変わっていた。「隅田川」

「湯葉」における露地、瓦葺土蔵造りの家、暖簾、土間、帳場、奥の間、堀井戸、酒問屋、雑貨屋、長屋、「隅田川」にみられる大店の住居、医院、隠居所、紙問屋、露地、内玄関、格子戸、坪庭、店、奥、芝居の劇場、レビニュー小屋という言葉は、下町の景観をあざやかに描きつくしている。商家の場合、表に店があり、それにつづいて日常の住居である奥があつた。そこで営まれる生活は近隣社会と深く結びついたものであり、人々の生活圏は狭かった。

「五家相保つ」という五人組の制は全く廃れたれども、向三軒両隣との間柄は、自ら相親しまざるべからざる勢あり。引越の礼物もこの五家には贈るを習とす。町方にては町中に若衆の組ありて、若者概ね十七、八歳に至ればこれに加はる、……また町中には受持の仕事師あり、仕事師とはいはゞ町中を一手に花主としたる出入の工夫にして、多くは消防方を職とし、また土工を業とす。⁽⁹⁾

明治後期の東京、下町の生活の一断面をとらえると、食生活の面では、精進料理の多い東京の町では湯葉が煮物から即席吸物にまで主品の一つであった（「湯葉」）。また、下町の商家は御馳走のほとんどを店屋^{（10）}もので賄い、自分の家では惣菜しか作らなかつた（「隅田川」）。別の面では、町家は浴室を持たないのが普通で、主人も奉公人も銭湯へ行くのだった。乗物についてみると、昭和の初期にはタクシーも東京の町を縦横に走っていたが、電車通りからなかへはまだ入らない不文律があり、人力車も活用されていた（「隅田川」）。明治から大正にかけての都市交通機関の代表は路面電車で、大正八年においてさえ、市電が交通量の七八・五%を占め、当時の省線はわずかに一一・七%の交通量負担でしかなかった。⁽¹⁰⁾ 郊外電車は大正期以降になり急激に発達したのである。

明治三十年の東京について、紙漉平三郎はこう述べている。⁽¹¹⁾

「その時の東京市内の乗物は、まだ品川から浅草まで鉄道馬車が一筋通っていただけでした。……まだ電気灯はなく、漸く瓦斯灯だけでした。」

明治二十年代から三十年代にかけての東京の交通について志賀直哉が語る一節を挙げてみよう（「自転車」）。

「当時は自動車の発明以前であったし、電車も東京には未だない時代だった。乗物としては芝の汐止から上野浅草へ行く鉄道馬車と九段下から両国まで行く円太郎馬車位のもので、一番使われていたのは矢張り人力車だった。箱馬車幌馬車は官吏か金持の乗物で、普通の人には乗れなかった。」

田山花袋は、大正六年、博文館から「東京の三十年」という書物を刊行した。ここには、明治十四年頃から大正初年にいたる東京の生活と景観が活写されている。明治二十年頃の東京は彼の眼にどのように映ったか。

「その時分（明治二十年頃）は、大通りに馬車鉄道があるばかりで、交通が不便であったため、私達は東京市中は何処でもてくてく歩かなければならなかった。……外国風の家屋と純日本式の家屋と相並んで軒をつらねてゐるのが、その頃の生活の状態のシンボルを成してゐた。それに区劃をわけて、江戸風の町と外国風の町とが出来てゐた。一方は開けて行く形、一方は衰へて行く形、一方は急進的、一方は保守的、さういふ二つの気分が東京の何処にも絡み合ひもつれ合つて巴渦を巻いているのを私は見た。」

明治十四年頃の東京は、泥濘の都会、土蔵造りの家並の都会、参議の箱馬車の都会、橋の袂に露店の多く出る都会であり、宮益の坂を下りると、あたりが何処となく田舎田舎して来て、藁葺の家があったり、小川があったり、橋があったり、水車がそこにめぐっていたりしたのである（「東京の三十年」角川文庫版、七頁、一三頁）。

当時の東京においては、渋谷あたりは市街地から隔った郊外であった。今、明治十七年一月七日届の「明細改正東京新図完」（編輯兼出版、井上勝五郎）をみると、宮益坂辺は、赤坂区の末端で、渋谷宮益町となっており、附近には開拓使一号、二号用地がみられる。道玄坂辺は、南豊島郡中渋谷村である。南豊島郡には、ほかに千駄ヶ谷村、角筈村、代々木村などの村名があった。明治三十三年、式万分ノ一割、「地理東京全図」をみると、環状線の枠内で東京の市街地は完結しており、新宿、渋谷、大久保あたりは、いずれも郊外地であった。

奥井教授によると、明治・東京は東北図型を示し、昭和・東京は西南図型を示すという。これは、郊外が主に東京の西南部に向つて発展したことを意味し、同時に都心点⁽¹²⁾が移動したという意味である。明治・東京の中心は日本橋とみるのがよいが、仮に東京駅を中心とすると、明治・東京は、半径約四料で描かれる地域に該当し、東は本所、深川、北は上野寛永寺、西は四谷、信濃町、南は三田、田町を境界とするのである。次の一節は、都心点の移動を説明している（「明治・東京の性格」八頁）。

「明治・東京の中心は須田町―日本橋であった。神田須田町は当時まさに『都に名高き須田町』であった。しかし大正期を経てこの中心は南下し、今日の銀座がそれに代るに到ったと同時に、銀座八丁それ自体も同じ南下の変遷を示している。」

須田町周辺の景観については、先に「湯葉」の一節で挙げたとおりである。

さて、郊外についてみると、花袋の「東京の三十年」によると、明治二十一、二年頃、柳町の裏には竹藪があり、それから次第に奥に早稲田の方に入って行く⁽¹³⁾と梅の林や畠がみられ、昔の御家人の零落して昔のままに残って住んでいるかくれたさびしい一区画があったりして、山の手はさびしかった。この頃には、到る処に団子に鮎位を置いた休茶屋がよくみられたのである。当時、寺参りには信仰の意味もあったが、同時にそれは、一種のレクリエーションをかねていたとみてよい。

「寺参りなどに来た人達が皆そこに休んで行くのである。車や電車の便のなかった昔は、人は大抵のところはみな歩いて行かなければならなかったのである。近郊の趣味を全く破壊し去った電車！……静かに入って物を思ったり何かするに好いやうな林は、まだその頃はそこに残ってゐた。……それに、その時分は一つしかなかった山の手線の汽車の音が、夕暮に遠く野を掠めてきこえた。」

大正六年頃には、花袋によるとそうした光景はみられなくなったという。郊外電車は主として西南部に発達し、武蔵野は次第に蚕食されて行ったのである。

「この頃（明治四十二年頃）の東京の発展は目覚ましいものであった。……市区改正は既に完成され、大通りの路はひろく拡げられ、電車は到るところに、その唸るやうな電線の音を漲らせた。」

明治十四年あたりの東京は？泥濘の路に円太郎馬車の駛った東京は？橋の袂に飲食店の多く出てゐた東京は？箱馬車の通つた時分の東

京は？

電車が出来たために、市の繁華な場所も次第に変わって行った。郊外に住む人も、買物をするには、その近所で買はずに、電車で市街の中心へと出て行った。従って三越、白木屋、松屋などという呉服店も大きな構へとなった。

主として電車の交叉するところ、客の乗降の多いところ、さういふ箇所が今迄の繁華を奪ふやうになって、市街の状態が一変した。銀座の尾張町の角、神田の須田町、上野の広小路、それに見附見附の街は昔とはまるで変わってしまった。交通の便につれて、住民の種類の変わって行くのは、寧ろ本能的、無意識的と言っても好い位で、注意して見てみると、其処に一番烈しい変遷の渦を巻いてゐるのを見ることが出来た。……

概して、東京の外廓は、新しく開けたものだ。新開町だ。勤人や学生の住むところだ。そこには昔の古い空気は少しも残ってゐない。江戸の空気は、文明に圧されて、市の真中に寧ろ底の方に微かに残ってゐるのを見るばかりである。

かうして時は移って行く。あらゆる人物も、あらゆる事業も、あらゆる悲劇も、すべての中へと一つ一つ永久に消えて行ってしまふのである。」「東京の三十年」

明治・東京の生活と景観は、こうして急速に変貌をとげ、大正・昭和の東京は、新たな姿をみせるようになるのである。たしかに明治・東京には江戸の名残りがみられた。しかし、交通機関の発達、人々の生活様式の変貌などにより、その名残りは次第に消え失せ、大正・東京においては、特に郊外地の開発も進み、生活圏も拡大し、明治の生活体制が大きく崩壊した。大正時代は、いわば、都市の生活、階層、地域、形態の各構造の変動、過渡期であったといえるだろう。

明治・東京の生活は、すでに述べたとおり、普通、町内集団といわれるような狭い生活空間において完結する傾向があった。その空間はいわば、自分の生活の領分であり、そこには一つの風があった。

「ある日路は思いあぐねて銀座にある高総屋を訪れた。煉瓦造りの銀座の町は須田町と違ってハイカラである。路はこの町へくると場違いを感じるが、自分の家を一步出たときからの解放感を味わうのだった。

少しばかり角度の違った町が、世間の狭い路には目新しいのであった。」「湯葉、明治後期の東京」

町内集団ないしは近隣集団は、明治を降るにつれ、次第にその枠をくずして行った。下町の性格は、階層、地域、形態、

生活の各構造において変貌して行ったが、それとらばらの関係で、山の手、郊外が開け、そこに新たな生活基盤、生活体制、生活理念、生活景観がみられるにいたつたのである。

さて、郊外の生活及び景観は、どのような姿を示したか。東京の郊外も時代によりその性格を異にしたのである。明治・東京の郊外は、今日のそれとは異なり、むしろ、別荘地という性格をみせていた。そこは生活の本拠ではなく、郊外の住居は、若干の地元民を除いては、下町住民の控宅であり、寮であり、その意味でまさしく別荘であった⁽¹³⁾。

「ある日、歌は路をつれて向島の亮一の出養生の別宅へ行った。二人は須田町から鉄道馬車で浅草まで出た。枕橋を渡って、向島土手からすこしはいた閑静な一帯は寮や別宅が多かった。……」

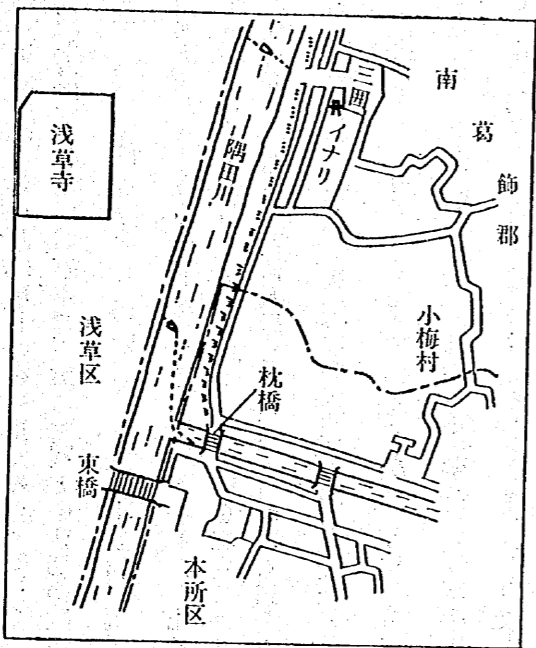
歌は子供のお供で海や山へゆくことを「島流しはごめんだ」といった。下町のごたついた、屋根と屋根、庇と庇がかけ渡された下で、隣りのひじきを煮る匂いを嗅いでいるのが歌の性にあつていた。静かといつても向島が限度でそれ以上はさびしくて堪えられない。」「湯葉」

この一節によつても郊外の性格と下町に生活する人々の感情の動きがうかがわれる。

芝木好子の「隅田川」と永井荷風の「すみだ川」の一節を対照させてみると、郊外の生活景観が鮮明となる。まず芝木好子の「隅田川」に次のような箇所がある。

「吾妻橋を渡って、引き川の枕橋を渡ると、堤はお花見で、堤下はもう向島である。向島古桂庵は三田神社の境内のわきであった。古桂庵は元武家の下屋敷であつたところを、日本橋の川源が老父のために買い取つたもので、ながい年月にすっかり庇が傾いたのを補修しながら保つた隠居所である。その老人も二年前に亡くなったが、

第6図 向島、下町の郊外



明治17年1月、明細改正東京新図による。(明治33年、式万分ノ一割、地理東京全図をも参照)

都市の生活と都市の構造

花の季節になると川源は親しい客を招くのだった。門をはいと細い石畳みで、奥に玄関と中仕切の門がある。」

ところで、荷風はこう書いている(「すみだ川」)。

「堀割つたひに曳舟通から直ぐさま左へまがると、土地のものでなければ、行先の分らないほど迂回した小径が三囲稲荷の横手を巡って土手へと通じてゐる。小径に沿うては田圃を埋立てた空地に新しい貸長屋がまだ空家のままに立並んだ処もある。広々した構への外には大きな庭石を据並べた植木屋もあれば、いかにも田舎らしい茅葺の人家のまばらに立ちつづいてゐる処もある。」

右に挙げた三囲稲荷周辺の向島の生活景観は、いわば、下町郊外の描写とみてよいが、大正期に入ると、山の手郊外が急速に開けたことは、これまでにくりかえし述べた。東京の郊外が発展したことは、わが国における東京の位置がますます重きをなし、東京の機能が全国的な水準で大きな影響力を持つにいたったことを合せて考えてみるべきである。

「今は(大正六年)、電車の線(京王電車線)が川(元の玉川上水路)に添って出来て、あたりがすっかり明るく開けたけれど、二、三年前までは、其処はさびしい野趣に富んだ川添の路であった。其処には川に橋がかかっている、墓地だけ寺から離れてゐるやうなところもあれば、松の樹の細かい葉に夕日が静かにさして来るやうなところもあった。」

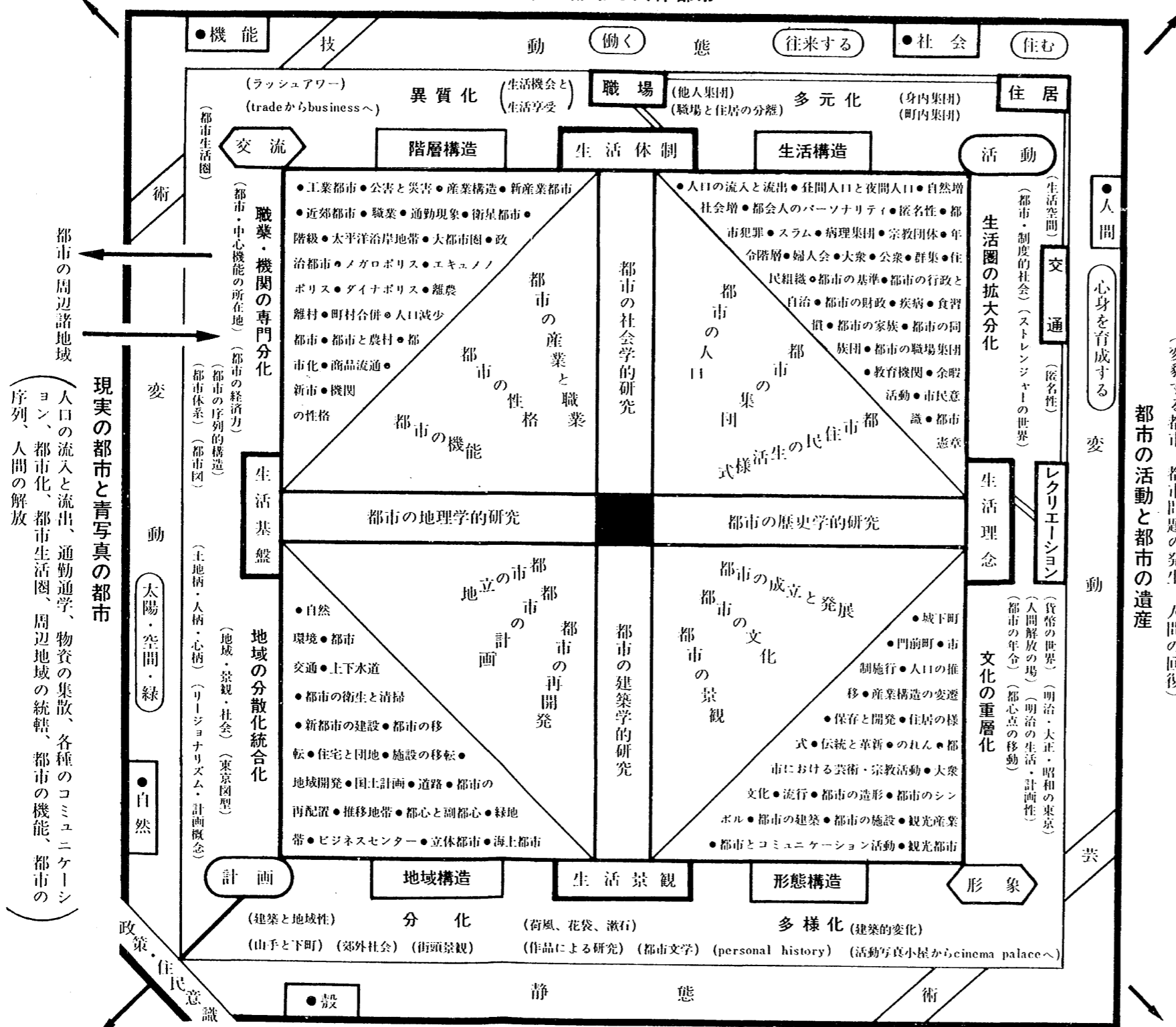
田山花袋は「東京の三十年」でこのように述べている。芥川龍之介の「秋」によると、郊外、新開地、電車、借家という言葉が眼につくが、当時、郊外は新開地とよばれており、電車や借家は郊外の点景であった(本節、冒頭の寅彦の文章を見よ)。

「彼女はそこで妹夫婦の郊外の新居を尋ねる時も、新開地じみた電車の終点から、たつ一人俤に揺られて行った。彼等の家は、町並が葱畑に移る近くにあった。しかし隣近所には、いづれも借家らしい新築が、せせこましく軒を並べてゐた。のき打ちの門、要もちの垣、それから竿に干した洗濯物、——すべてがどの家も変りはなかった。」

郊外は新開地であったが、それは文化村とでもいえそうな景観を示しており、そこには郊外文化が渦巻いていたのである。郊外には伝統やしきたりにとらわれない若さと自由の空氣がみなぎり、青白きインテリ文化が育ち、小市民的な生活といった言葉で代表される生活がみられたのである。東京の郊外は、時代時代により次第に移動したが、中心部に近い山の手

第7図 都市の生活と都市の構造

行政都市と実体都市



都市の空間と都市の時間

の部分は、C.A.Doxiadisの人間定住社会の要素である。
 の部分は、Le Corbusierの考え方である。
 の部分はアテネ憲章における都市の四つの機能である、
 ()内の言葉は、奥井復太郎教授の用語である。

ここでは、生活構造、階層構造、地域構造、形態構造を四つの領域としてまとめてみた。そして、生活体制、生活基盤、生活景観、生活理念という四つの柱をたて、対角線上に活動と計画、交流と形象を配置してみた。

は、官吏、軍人、実業家のすまいとなり、山の手郊外は会社員、教員、学者、地方からの上京者の住宅地として開けたのである。下町は、かくして、江戸っ子のふるさととなつていった。郊外の境界線（郊外線）はその環をひろげ、都市の鼓動といわれる通勤現象がみられるようになった。郊外は、拡大して行く都市の触角である。

「この家の主人、堀越玄鶴は画家としても多少は知られてゐた。……現に彼が持つてゐた郊外の或地面などは生姜さへ稼に出来ないらしかつた。けれども今はもう赤瓦の家や青瓦の家の立ち並んだ所謂「文化村」に變つてゐた。」芥川竜之介、「玄鶴山房」

新宿を中心に新開地の郊外として開けたのは、まず、大久保、淀橋、柏木、千駄ヶ谷であつた。特に大久保一帯は、典型的な郊外生活者の居住地であつた。明治時代の大久保は、つつじの名所で、花の頃は東京からの遊覧客でにぎわつた。

「それは明治四十一年の秋で、児島君の家は大久保にあつたが、その大久保がまだいかに郊外の新開地らしい趣を持っていた。空が広く見晴らせて、生け垣のなかに小さい洋間の応接間が見える。……」和辻哲郎、「児島喜久雄君の思い出」

一方、島崎藤村による大久保辺の描写はこうである（「新生」）。

「新宿まで電車で行つて、それからまた岸本は子供等や節子と一緒に大久保の方角を指して歩いた。ずっと以前に一年ばかり彼が住んだことのある郊外……その頃の樹木の多かつた郊外が全く變つた新開の土地となつて彼の行先にあつた。」

戸川秋骨もまた「春の大久保村」で次のように書いてゐる。とくにこの一節の末尾に氣をつけてみたい。

「郊外の第一の特色は声と色とであらう。……鶯の声は何所の郊外にも同じであらうが大久保の花の色には特色がある。それは緋と丹と朱との躑躅の色である。尤もこの辺も開けるに従つて自然ならぬ人間の声も聞えるようになりはじめた。三味線の音さへ時には籬を洩れて聞える事もあつたが、最も盛んなのは謡の声である。」

ここにも山の手の生活における芸能の一断面がみられるのである。謡の声が聞えるのには、それだけの意味があることを忘れてはならない。つまり、謡や三味線をうけいれるだけの生活の基盤があり、またそれらをたしなむ生活の体制があつたということである。

東京散策記と題する荷風の「日和下駄」に「閑地」という文がある。

「戸山ヶ原は旧尾州侯御下屋舖のあった処、その名高い庭園は荒されて陸軍戸山学校と変じ、附近は広漠たる射撃場となつてゐる。この辺豊多摩郡に属し近頃までつづじの名所であったが、年々人家稠密して所謂郊外の新開町となつたに係らず、射撃場のみは今猶依然として原のまゝである。」

こうして荷風の筆による大久保辺の風物描写を加えてみると、郊外、大久保の姿がさらに明かに浮び上つてくるのである。

「のどかになった。……郵便をいれにゆく道すがらひとの庭などをみてあるく。いちめん芝生にして、小山のうへにあづまやをたてた家がある。花壇にはいろいろのヒヤシンスが今を盛り咲いてゐる。また琴の音のもれてくる家がある。思ひ出し思ひ出しひいてるやうにただえがちにころりん、ころりと鳴る。」

このような文をのこしたのは中勘助である（「郊外」）。

大正・昭和の東京の山の手郊外は、明治・東京の郊外と性格を異にするが、それは、大正・昭和の東京の郊外が、生活の本拠地として発展したという意味である。郊外はこうしてますます武蔵野の面影を失わせながら、拡大してきた。

- (1) この点については、奥井、「明治・東京の性格——都市生活史についての覚書——」、三田学会雑誌、第四六巻、第六号を参照せよ。
- (2) 拙稿、「東京の郊外」、三色旗、第一九九号、一九六四年をみよ。
- (3) 奥井、昭和三十年大学講義「都市問題」ノートによる。なお、前掲「明治・東京の性格」をみよ。
- (4) 身内集団と他人集団は、奥井教授がしばしば使用した独自の言葉である。
- (5) なお、芝木好子の「隅田川」（新潮文庫版）一四七頁—一四八頁にかけて、適切な例がみられる。
「……高菱が時間通りに洋服で勤めるか」この想像が可笑しかったので、菊良は仰むいて自らを冷かすために、口の端に笑いをこぼした。ほとんど感覚的に拘束をうけつけない、みみちちさを嫌悪するものが彼の裡にあった。……」
- (6) 「明治・東京の性格」一七頁をみよ。

「そしてこれらの生活風俗は相互に反撥する。下町が山の手を目して『野暮だ』と云えば山の手は下町を『下卑ている』と貶す。そして自らを下町は粹となえ、山の手は上品、ハイカラと考える」（同論文一七頁の一節）

- (7) 「明治・東京の性格」九頁をみよ。
- (8) 平出鏗二郎、「東京風俗志中の巻」、明治三十四年発行、一二七頁（明治文化資料叢書第十一巻世相篇所収）。
- (9) 平出鏗二郎、「東京風俗志上の巻」による。
- (10) 「明治・東京の性格」、七頁をみよ。このような数字は、明かに「動き」における明治・東京の性格の一面を物語ると奥井教授はみる。郊外電車で明治年間に発足したものは、「元の京浜電車、東武、玉川電車等四社に過ぎず、しかも玉川電車の如きは専ら多摩川の砂利運搬を主目的とするものの如くであった。」（同論文、七頁）
「十年前か前の事、玉川電車は玉川砂利を積んだ貨車を一台ずつ曳いて走つてゐた。三軒茶屋以西は客も至って少なかったといふ、その頃の話だ。」志賀直哉「風呂敷包」
- (11) 紙漉平三郎「手記」三四頁、製紙博物館編。
- (12) 「明治・東京の性格」、七頁をみよ。
- (13) 「明治・東京の性格」、七頁をみよ。
- (14) 「日和下駄」は大正三年八月から四年六月にかけて、「三田文学」に毎号連載された。

四、むすび

必ずしも道玄坂といはず、又た白金といはず、つまり東京市街の一端、或は甲州街道となり、或は青梅道となり、或は中原道となり、或は世田ヶ谷街道となり、郊外の林地田圃に突入する処の、市街ともつかず宿駅ともつかず、一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈し居る場処を描写することが、頗る自分の詩興を喚び起すも妙ではないか。なぜ斯様な場処が我等の感を惹くだらうか。……即ち斯様な町外れの光景は何となく人をして社会といふものゝ縮図でも見るやうな思をなさしむるからであらう。……更らに其特点を言へば、大都會の生活の名残と田舎の生活の余波とが此処で落合つて、緩かにうづ巻いて居るやうに思はれる。見

給へ、其処に片眼の犬が蹲て居る。此犬の名の通つて居る限りが即ち此町外れの領分である。」

国木独歩「武蔵野」

ここでは、都市の生活構造、階層構造、地域構造、形態構造について、特に東京の下町と山の手を例として挙げながら考察をすすめてきた。特に生活景観に重点をおき、作品の一節をその都度使用するという方法をとった。

さて、ふりかえってみると、本稿では、奥井復太郎教授の所説の紹介にやや頁を費し過ぎたようにも思われるが、私は「都市の生活と都市の構造」について述べる一方、本稿の内容を逆に投影した場合、奥井教授の所説、業績及びその姿勢、関心が鮮明に浮び上ることを期待したのである。果してこの目的は、どの程度達せられたか。いずれにせよ、我国の都市研究、特に都市社会学研究の分野に鍬を入れ、この分野の開拓者として多方面にわたる業績を残された奥井教授の所説をあらためて考えてみることは、斯学の今後の発展のために必要であり、有益なことであろう。

もう一つ、作品を引用する方法であるが、これは、生前、奥井教授が度々使われたもので、その意味で、本稿では徹底してこの方法を採用してみたのである。特に生活景観を描く場合、この方法はきわめて有効であると思う。

山の手と下町の問題を含めて、東京の生活史は、奥井教授にとつても深い関心をよびおこした問題の一つであり、また、生活基盤、生活体制、生活理念という考え方は奥井教授の所説の基礎を成していたから、それらをここでできるだけ生かしてみたい、と考えたのである。

では、東京の生活は、明治以降どのようにかわつたか。それは色々な角度でとらえることができるが、次のように考えてみたい。

一言でいえば、東京の生活は、歩く、世界から乗る、世界の生活へとかわつたのである。もちろん、このような説明は、東京に限つたものではない。このような変化は、狭い完結した社会がくずれ、生活圏が拡大したことを意味する。近隣社会ない

しは、町内集団、身内集団が解体する傾向がみられたのである。いいかえれば、生活の三拠点⁽¹⁾が次第に分散して来たので、職場と住居(店と奥)の分離が下町においてみられたこと、さらに都心に大企業が集中して(ビジネス・センターの形成)、俸給生活者が郊外に居をかまえて、職場への通勤がみられたことなどを合せて考えてみなければならぬ。また、現物給与から現金給与へ、大福帳から近代的な事業経理へ(家計と事業経理の分離)という変化も以上のような事実の底にあった。

生活の基盤、体制、理念、景観の変化は、その速度において異なり、また、変化の要因を一概に説明することは難しい。しかし、明治・東京以降をみると、まず、東京が我国の政治、経済、文化の中枢機能の所在地として日本の都市体系の中で特に重要な位置を占め、東京の影響力は全国に波及し、全国の動きが東京に反映するものであった点を考えてみなければならぬ。⁽¹⁾企業の集中、政治の中枢機関の所在とその統轄力の強化、文化活動の隆盛、交通機関の整備などが、東京の生活と都市、東京の性格に影響を及ぼした。そして、大正十二年の関東大震災が、東京の姿を大きくかえてしまった。大震災後の東京には、復興都市(荷風、「遷東綺譚」)の気風が満ちていた。

交通機関の発達⁽²⁾が郊外の発展を促し、都市の流動性が生じ、都心部が発展したこと、さらに狭い生活圏がこわれ、かくして広い行動半径が描かれるようになったことも忘れてはならないことである。大正・東京においては、特に山の手、西南部の郊外が急速に開けた。「近郊の趣味を全く破壊し去つた電車！」(花袋、「東京の三十年」)

東京の郊外は新開町で、勤人や学生の住むところであり、そこには昔の空気は少しも残っていない、江戸の空気は文明に圧迫されて市の真中のむしろ底の方にかすかに残っている、と花袋はみた。

明治二十年頃の東京には、すでに新旧の二つの生活景観がみられた。伝統と革新、保存と開発の対立が、そこにあつたといえるだろう。その頃には、外国風の家屋と純日本式の家屋が対照的にあり、外国風の町と江戸風の町があつた。花袋によれば、前者は開けてゆく形で急進的な気分をあらわし、後者は衰えてゆく形で保守的な気分をあらわしているのである。(東

山の手と下町は、明治時代において一応区画されるが、明治・東京の下町には、まだ、江戸の風が名残りとしてみられたようである。明治・東京の典型は、下町の商人、職人⁽²⁾であり、昭和・東京の典型は、山の手⁽³⁾の俸給生活者である。大正時代は、明治・東京が昭和・東京へと大きくうつりかわる過渡期であった。関東大震災と郊外電車の発達、この二つは明治・東京を次第次第に崩壊させ、あらたに昭和・東京があらわれる契機となったと思われる。玉川電車は当初は、砂利運搬の機関といってもよかったが、それが次第に乗客本位の郊外電車となったことも一つの相として注目すべき一駒である。明治時代の郊外は生活の拠点としての性格がうすく、大正以降の郊外は、生活の本拠となったという点も、東京の地域、階層、形態、生活の各構造の変化と深く結びついているのである。ここでは、郊外の例としては、下町の向島と山の手の大久保を対照的に挙げてみた。

典型的にみて大きくとらえると、下町の生活構造は、商いと手仕事、狭い生活空間、伝統とときたりへの傾斜として、階層構造は商人、職人として、地域構造は東北図型の古い東京として、形態構造は店と奥よりなる純日本風の住居と狭い露地、坪庭として要約できる。これに対し、山の手⁽³⁾の生活構造は俸給生活、通勤、広い生活空間、自由と革新の気風として、階層構造は俸給生活者、学生、地方からの上京者として、地域構造は、西南部の新しい東京として、形態構造は新開地、郊外電車、門がまえのある家、垣根、赤屋根、として要約できる。

芸能の面では、下町の三味線、手踊に対し、山の手⁽³⁾の琴、謡である。このような対照はやがて混合し消滅するのであるが、下町と山の手⁽³⁾の性格を考える場合、このような芸能の対照的な姿をみることも意味があるだろう。

いいかえれば、生活基盤の面では下町の営業、手仕事に対し山の手⁽³⁾の勤めを、生活体制の面では下町の封鎖性に対し山の手⁽³⁾の流動性を、生活理念の面では下町の粹、計画性、伝統に対し山の手⁽³⁾の洋風、革新を、生活景観の面では下町の露地、店

と奥、格子に対し山の手⁽³⁾の郊外電車、貸屋、洋間の応接間を対比させて考えることができる。

本稿においては、生活構造、階層構造、地域構造、形態構造の四つの面の関連性を指摘しながら、複雑な都市現象の分析に対し、この四つの構造をおさえる方法で都市の問題の考察が可能ではないかとの試みを述べてきたのである。生活、階層、地域の三つの面については、これまでの都市研究において多くの分析が加えられてきている。ここでやや新しい視角を提出したとすれば、それは、形態構造や生活景観に重点を置いて、他の面を考えてみたということであろう。都市社会学の研究において、このような生活景観や形態構造を今まで以上に考慮するならば、なお新しい研究分野や視角が求められるにちがいない。都市問題の多くは、すでに述べた四つの構造の間に不均衡がみられたり、生活の四領域(基盤、体制、理念、形態)の変化の速度が異なったりすることによって起きる。人間定住社会の科学としてのエキステイクス(Existences)を構想したギリシアの建築家、ドクシアデイス(C. A. Doriaeis)は、定住社会の要素として人間(変化する人間)、社会(変化する社会)、機能(変化する機能)、自然(崩壊される自然)、殻(建設されなければならぬ殻)を挙げ、これらの間に調和の状態をつくり、定住社会の中における人間が幸福で安全であるために援助を与えること、これがエキステイクスの目標であるという⁽⁴⁾。また、モデルロール(Morlor・人間的尺度、標準尺)の考えを示し、近代建築の五原則(ピロティ、独立骨組、屋上庭園、自由な平面、自由な立面)を打出したル・コルビュジエ(Le Corbusier)は、住む、働く、心身を育成する、この秩序と制約の中で往来する、この四つを人間を中心にした四つの機能とみる。そして彼はいう。

「太陽、空間、木、それらを私は、都市計画の基本的な材料、(本質的な喜び)と認める。」(伽藍が白かったとき)

東京の生活と東京の構造において、現在、太陽と空間と木が果して豊かであるといえるかどうか。明治・東京以来、東京は急速に変貌しながら、一方では多くの都市問題を生み出して来たのである。都市生活の基本的な単位の間⁽⁵⁾に調和を生み出すように、人間中心の都市計画を考へることは、都市の生活と都市の構造を問題とする場合にも無関係ではない。

おわりに、都市はまことに万華鏡の世界であり、その姿の分析は容易でないが、ここでは一応の試案として、第七図のような図表をまとめてみた(九六頁を参照せよ)。この図表については、今後、修正をかさねて行きたいと思う。本稿で述べた諸問題は、すべてなんらかのかたちで、この図表におさめたつもりである。(一九六五年九月)

- (1) 「元来、一国或いは世界に於ける都市分布の図型は、各々その時代の経済・政治・社会構造の裡に配置された一つの聚落図型である。従つて又其の図型に於いて中心点を占める当代の中央都市の在り方は、其の時代の組織原理と指導精神を最も好く代表するものなる。」「明治・東京の性格」一頁。
- (2) 奥井教授は、山の手と下町とは今日のように機能的地区区分ではなく、明治・東京においては、生活身分的区別を持っていたという(「明治・東京の性格」)。
- 下町の商人、職人の生活は、(一)地元性、(二)伝統性、(三)商人道の成立、(四)山の手と下町とは、はっきりした社会的身分的相違をみせる、という四つの特徴を示すのである(「明治・東京の性格」九頁)。(二)の伝統性は、商業においては、出入の制度やおとくい制度となつてあらわれた。
- (3) 「かくて商人・職人の下町・東京は明治から大正・昭和への推移に於いてサラリーマン、工場労働者の山の手の東京となつたのである。」「明治・東京の性格」二〇頁。
- (4) エキステイクスとは、人間定住社会の問題の全体性をとらえ、完全な一つの体系の中に統合しようとする科学である。ここでいう機能とは、人間とその容器としての殻を結ぶ要素であり、殻とは住居をさす。機能は、住居、交通、生産、余暇等に区分され、自然の要素は、土壌、地上の表面、水、空気、天候であり、殻は、家屋、ビルディング、コミュニティ施設の諸要素に分解できる。「住民といえは何千年という間、都市の住民は人間と家畜だけであつた。十九世紀になり鉄道が生まれて都市の形態に影響を与え始めた。そして二十世紀には都市の居住者としての人間に加えて機械、その中でも主として自動車に加わつてきたのである。……人間の動きはせいぜい時速五秒のスピードであつた。しかし自動車は二百秒の速度が出せるのである。……昔は都市の形は人間の動きによって影響を受けたのであり、今は人間と自動車やその他の機械に影響を受けている。」ドクシアデイス、磯村英一訳、「新しい都市の未来像——エキステイクス」
- (5) 一九三三年、CIAMの第四回会議で決定された都市づくりの憲章である「アテネ憲章」によると、都市の四つの機能は、一、住居、二、レクリエーション、三、職場、四、交通である。

憲章七六、都会の支配内のすべての次元は、人間のスケールに関連づけられるべきである。

憲章七八、都市計画は、この四つの主要な機能をもつ都市内の相互関係的な位置と内的構造を決定すべきである。

ところで、ル・コルビュジエは、現代の大都市について次のような姿を描いたが、今日のわが国の大都市についても、このような描写は、決して無縁ではない。

「毎日毎日の争い。というよりも、茫然とさせる都市の真只中における一分毎の争い。都市(ニューヨークあるいはシカゴ)の暴力の中にいるときの絶望の数時間、そして仙境的壮麗さの中にいるときの感激と信頼と楽観の数時間。私は我慢できない……身を磨り減らす遠距離の通勤、騒音を爆発させる地下鉄、場末の黒ずんだ煉瓦の街や硬化した非情の街——賃貸しの箱の街、金銭の世紀の都市をなす菓窟の街(ニューヨークやシカゴの貧民窟)——の未開野蛮な洞穴、それらによって、幾百万の人間が質の低下を蒙らされているのだ。」ル・コルビュジエ、生田勉他訳、「伽藍が白かったとき」

現代の都市における究極の課題は、人間の回復という一言につきるだろう。

なお、ここで参照した奥井復太郎教授の著書、論文、講演記録、講義ノートは、次のとおりである。

著書

「現代大都市論」 有斐閣、昭和十五年。

「都市経済論」 慶応出版社。

論文

「明治・東京の性格——都市生活史についての覚書——」三田学会雑誌、第四六巻第六号、昭和二十八年、一一二頁。

「再論『現代大都市論』」三田学会雑誌、第五六巻第一〇号、昭和三十八年、一一一七頁。

「リージョナリズム」三田学会雑誌、第五七巻第七・八号、昭和三十九年、一〇一—二〇頁。

講演記録

「現代大都市の経済・社会的性格」

「荷風と東京」三田評論、第五八四号、二二—三二頁、同第五八五号、一〇—一三頁、昭和三十四年。

講義ノート

「都市問題」昭和三十年、慶応義塾大学。

都市の生活と都市の構造